

松本茂

東京国際大学 言語コミュニケーション学部 教授
国際コミュニケーション教育研究所 所長

1980年代からおよそ40年にわたりコミュニケーション教育の第一線に立たれている松本茂氏。チャレンジ精神があり、自己研鑽を積んでこられた。松本氏の忘れられないエピソードは、15年ほど前の冬にご夫妻で訪れたインドの旅だという。「これまで多くの外国を訪ねましたが、インドのインパクトはその後も含めて一番大きいです」。ガンジス川は予想以上に急な流れで、命の危険を感じながら沐浴を経験すると、「ここで流されて亡くなれば最高の死に方だ」と地元の人に真顔で言われたそう。今でもそこでも発展している地域もあるが、当時は幹線道路を種々雑多の交通手段が入り乱れていた。牛車、何人もまたがったスクーター、人で溢れ返るトラックやバス、かと思うと高級スポーツカー等々。道端には衝突した車が転がったまま。1時間で日本の1年分のクラクションの音を聞いた気がしたそうだ。まさに喧騒とカオスの世界。だがそんな光景を目の当たりにして「懸命に、そして自由に生きているな。それに比べて自分は固定概念に縛られている」と思いました。それから、「細かいことを気にしなくなりまし」と話す松本氏。そこには何でも受け入れてプラスに変える松本氏のポジティブな生き方と、その人柄が表れている。

撮影◎戸川覚

リスペンククトから始まる。 ディベートを学ぶジュニアズで、 自分を俯瞰する力を身に付ける。

議論や討議を意味する「ディベート」という言葉を耳にする機会が増えた。その最大の功績者の一人が、コミュニケーション教育者の松本茂氏だろう。問題を創造的に解決することを目指すディベートは、あらゆるものがグローバルに加速する時代にあって必須のスキルになりつつある。コミュニケーションの専門家であり、ディベート教育に長く携わってきた松本氏に、ディベートの活用方法と、円滑なコミュニケーションに配慮すべきポイントを伺った。

「PICCサイクル®」を 回すことで英語力が上達

伊藤 松本先生は、日本語および英語によるディベート教育やコミュニケーション教育学の第一人者でいらっしゃいます。また文部科学省の有識者会議などの委員として、日本の若者たちの英語力育成プログラムに関する提言をされてこられました。

はじめに先生の今日までの道のりをお聞かせいただけますでしょうか。

松本 私が英語と出会ったのは中学1年の時です。特に家が英語教育に熱心だったとか、両親が英語

を話せたというわけではありません。ごく普通に英語を学び、むしろ苦手科目の一つでした。ところが高校3年の夏休み、たまたま訪ねた英語学校のイベントで、日本人の大学生が「日本は日米安保条約を廃止すべきである」といった論題で英語のディベートをしているところに遭遇しました。内容はよく分からなかったものの「これならやってみよう」と思ったんです。それまで英語というと、s が付くとか付かないとか、ing がどうとかといった授業を受けていて、まったく興味を持てなかった。大学入試に必要な科目といった程度にしか捉えていなかったのですが、あの瞬間、「英語って、意見を述べ合って、意見をやりとりするのに使うものなんだ」と感じたわけです。そ

の日から使える英語力を身に付けることを目指すようになりました。NHKのラジオ講座を何度も聴いて音読の練習をしたり、映画館に通って洋画の家族ものやラブコメディを繰り返し観たりして勉強しました。そのほかにもオーディオテープやノシートといった音声教材を聴くとか、『イソップ物語』などやさしい英文の絵本もたくさん読みました。そうするうちに日本語に訳さずに英語がわかるという感覚がつかめてきたんです。それは私にとっての英語学習の第一段階で、そこからステップアップして、次は自分の身の回りのことなどを少しずつ話せるようになっていきました。